

氏 名：河 合 桃 代

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 5 4 号

学位授与年月日：平成 2 5 年 3 月 1 9 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：嚥下障害者への食事介助における看護師のわざの研究

—身体を介した相互作用に焦点を当てて—

The Art of Feeding : Interaction between Nurse and Dysphasia
Patient through the Body

論文審査委員：主査 武 井 麻 子

副査 坂 口 千 鶴（研究指導教員）

副査 守 田 美奈子

副査 吉 田 みつ子

副査 川 嶋 みどり（日本赤十字看護大学 客員教授）

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

人口の高齢化や脳血管疾患の発症等による影響で嚥下障害者は増加傾向にあり、介護度の重症化に伴いあらゆる領域で対応が必要となっている。また、診療報酬等の改正により嚥下リハビリテーションが地域でも継続できるようになり、口から食べることが見直されるようになってきている。しかし、嚥下障害者は原疾患が多様で、障害の発現の仕方が極めて多彩なことから、個々に対応して食事介助を行うことが難しく、家族、介護職者、さらに専門的知見のある看護師でも食事介助に不安を感じている。嚥下障害に関する先行研究において、嚥下機能評価や嚥下訓練の効果等に関する研究や嚥下障害者やその家族に焦点を当てた研究も増えているが、嚥下障害者への食事介助における身体を介した看護師のわざに関する研究はほとんど行われていないのが現状である。

【研究目的】

看護師と嚥下障害の身体を介した相互作用に焦点を当てて、食事介助のわざを明らかにすることである。

【研究方法】

研究デザインは質的記述的研究方法である。研究参加者は、嚥下障害者の食事介助に携わっている看護師 2 名と脳血管疾患による後遺症により嚥下障害となった者 3 名とした。研究期間は、2009 年 5 月から 2011 年 3 月までの 1 年 10 ヶ月であった。研究場所は、地方にある通所介護、認知症通所介護、訪問看護、居宅介護支援事業を行っている多機能型施設の短期入所生活介護（ショートステイ）とした。データ収集は、参与観察法とビデオ視聴をもとにした対話を用いて行った。参加観察は計 54 回行い、そのうち 37 回はビデオ撮影を行った。ビデオ視聴を用いた看護師

との対話については、許可を得て IC レコーダーを用いて録音し、看護師 1 名につき 1 回 15 分から 75 分（平均 43.6 分）を 14 回から 21 回（平均 17.5 回）行った。参加観察データはフィールドノートに記述し、付加的情報としてカルテや他の職員からのインフォーマルな情報も収集した。データ分析は、得られたデータについて試行錯誤的に分析を進める中で、一つ一つのコードおよびコードのリストを作り上げていくたき上げ式コーディングを用いて分析作業を行い、カテゴリーを抽出した。データ分析の過程で指導教員と老年看護学の教員に定期的にスーパーバイズを受け、解釈の妥当性を吟味し洗練させた。データの分析内容については、適宜研究参加者である看護師に確認した。

【倫理的配慮】

施設長に研究の目的と方法を書面を用いて口頭で説明し、了承を得た。施設長を通して看護スタッフ、嚥下障害者とその家族に研究の概略が説明された。看護師、嚥下障害者およびその家族には、研究者が研究の目的や方法について書面を用いて口頭で説明し、同意書に署名を得た。署名困難な参加者の場合にはキーパーソンである家族に代筆を依頼した。ビデオ録画には研究参加者以外の施設利用者やスタッフが映らないよう細心の配慮を行った。また、研究への参加を断っても不利益を被らないこと、研究の途中でも中止できること、得られた内容は厳重に保管し、研究終了後速やかに消去すること、緊急時や必要時には研究者も対応に協力することを約束した。なお、本研究は日本赤十字看護大学倫理委員会の承認を得て行った（第 2010-74）。

【結果】

1. 研究参加者の背景

看護師の属性は、ショートステイに勤務し嚥下障害者への食事介助に携わっている 2 名で、看護師経験年数は 7 年から 30 年以上で、嚥下障害者のいる部署での勤務年数は 3 年から 30 年以上であった。嚥下障害者の属性は、70 歳代の男性 2 名と女性 1 名で、脳血管疾患による後遺症で嚥下障害に至り、介護度 5 であった。認知機能障害、失語症、構音障害等あるが簡単なコミュニケーションは可能であった。

2. 嚥下障害者と身体を介した相互作用におけるわざ

- 1) 食べる構えをつくる：看護師は、嚥下障害者が疲労や眠気で声をかけても口を開けようとしない際、下唇にスプーンや食器で触れて食べ物を準備している合図を送り、食べる意欲や意思を確認した。
- 2) 舌との触れあいを待つ：嚥下障害者が口を開けて食べる意思を示すと、看護師はスプーンに盛った食べ物を上顎の硬口蓋に当て、食べ物を口の中に入れたことを知らせた。そして硬口蓋に食べ物を当てたまま、嚥下障害者の舌が食べ物を取りに来るのを待った。嚥下障害者が疲労により舌を上げることが困難と判断すると、看護師はスプーンを硬口蓋から移動して舌を探した。その際、舌を感じられるようスプーンの柄に指を密着させて感覚を研ぎ澄ました持ち方に変えた。
- 3) 舌の動きを補う：看護師は、スプーンを移動させて嚥下障害者の舌の位置を確認すると、スプーンで舌を押して動きを刺激した。同時に、指を用いて下顎から舌骨筋を押し上げて、舌を硬口蓋に近づけるよう動きを補った。
- 4) 噛む動きをつくる：看護師は、スプーンを介して嚥下障害者の舌が硬口蓋まで上がるのを察知すると食べ物を舌の上に置き、さらにスプーンで知覚の弱い上唇をこすりながら抜くことで噛み始めるきっかけをつくっていた。そして、嚥下障害者が咀嚼を始めると麻痺により舌で食べ物を

まとめることが難しいため、看護師は嚙む動きに合わせて下顎から舌を支えた。

5) 飲み込みを助ける：嚥下障害者は食べ物を嚙んでまとめるが、唇や頬の力が弱いので口を閉じることができず、また飲み込みを司る嚥下筋の低下等により嚥下反射が起きにくくなっていた。看護師は麻痺のある唇でも口を閉じることができるように、手で口角を引き上げて笑顔を促し、また咽頭を上げるために下顎から指で舌骨筋を引き上げる試みも行っていた。

【考察】

1. 身体を介した視覚的イメージ：看護師は、嚥下障害者がどのように食べているのか見極めるために、スプーンを自身の身体の一部と捉え自らの手の感触を手がかりに、まるで自身の指に嚥下障害者の舌が直接触れているかのように嚥下障害者の舌の動きを感じ取っていた。さらに、看護師は客観的には見ることでできない嚥下障害者の口の中を、スプーンを通して自らの手に伝わる感触から視覚的イメージとして再構成し、嚥下障害者の食べる状況を理解していた。

2. 身体を介して感じる声への同調性：看護師は、スプーンを介して嚥下障害者の舌の動きを感じ的过程中で、嚥下障害者が麻痺を伴いながらも舌を動かそうとしていることに食べる思いや意気込みを察知していた。そして、看護師は舌の動きに嚥下障害者の食べたい思いを聴き、その思いを受け止め、嚥下障害者の動きに同調して自らの手の動きを変えることで応えようとしていた。

3. 主体性を引き出す身体の補完性：看護師は、食べる機能を司る舌、唇、頬といった身体の動きを補いながら、麻痺により連続性を喪失した身体を意識させることで、自ら食べている感覚を再獲得させていた。嚥下障害者にとってこのような身体への補完性は、食べるという機能を再獲得することだけではなく、自らの身体の統合、さらには自分らしさをも取り戻す機会ともなっていた。しかし、最終的には嚥下障害者自ら食べ続けなければならず、看護師は口角を自ら引き上げる工夫、頸部の屈曲角度の工夫、上唇に食べ物をつけ舌を引き出す工夫等を行うことで、嚥下障害者が自ら食べ続けられる動きをつくり出していた。

論文審査の結果の要旨

嚥下障害者に対して一体どのように食事介助を行うことができるのかその具体的な技術が明確になっていない中、目に見えない嚥下障害者の口の中での食事介助の詳細がわかりやすく記述され、そのわざの特徴も浮き彫りになったことは評価できる。特に、看護師が手の感触を手がかりに客観的には見えない口の中の様子を視覚的にイメージし、また手を介した舌の動きから嚥下障害者の意思を読み取って同調させていたことは、看護師が身体に触れる感触を手がかりに全身の感覚を使って援助を行っていることへの根拠として評価できる。また、看護師が嚥下障害者の身体の動きを補いながら、麻痺により連続性を喪失した身体を意識させることで、自ら食べている感覚を再獲得させていた身体への補完性の重要性について論じられている点も評価された。

以上の論点を踏まえ、博士学位論文審査専門委員会では、本論文を学位規程第3条に定める博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。